

## 『和泉式部日記』の構成試論

久保木 寿子

『和泉式部日記』（以下『日記』と記す）の作品構造を考察する場合、それは屢々時間設定に係わる問題として検討されてきた。長保五年の史料との照合が試みられたり、作品内の時間設定の不合理を指摘するという方法等には、『日記』の構造を、日次単位の、経験的な時間軸に沿うものとして捉えるという前提があると云ってよい。「四月十余日」から翌年正月迄の経過が、「又の日」「二三日ありて」「かくて」等で綴られていくのであるから、継続的な時間意識があるのは論を俟たない。しかし、そのような時間の上に具体的に展開される個々の場面が、現実体験を生起するままに配置し構成したと、無条件に見てよいかどうか。問題は、作者が経験的な事象をどう收拾整理し、どのような方法で場面形成を果たしたのかということにあると思われる。それは又、リリック・プロットと言われるこの作品の構成に対する再検討を意味するであろう。

『和泉式部日記』が和歌を中心とした作品であることは言うまでもない。作品中の和歌を媒介にして表出された心理の読みとり

も深められ、引き歌表現・贈答形態の特徴なども詳細に考証されてきた。が、より総合的に、作品構造を規定する程のものとして、『和歌的な論理』の存在を想定する必要があるのではなからうか。長保末から寛弘期に至れば（当『日記』の成立上限に当る）、ある素材に対して詠まれるべき和歌の主題がかなり固定化して<sup>(3)</sup>くる。経験的な事象、心象は、ある特定の美的観念に従った收拾を受けて再構成される。又、和歌相互の關係についても、経験的時間に沿った排列とは別の、收拾され観念化された排列構造が見られるに至る。『古今集』や『拾遺集』の排列の基底に、あるいは『古今六帖』（以下『六帖』と記す）の分類題の上に顕在化された形で、和歌相互の位置を見定めることも可能であろう。題詠が和歌の一般的詠法として定着する迄には至らないが、和歌の素材と詠歌内容の結びつきが固定化、観念化しつつあった当代の情況に於いて『日記』を考えるのであれば、その和歌への依存度の強さからしても、作品構成に投影される『和歌的な論理』に注意しなければならないであろう。継続的な時間軸に絡みながら、時

にそれと拮抗する形で展開する和歌的な時空の在り様を検討し、『日記』の位相を見定めることにしたい。

## (1)

最初に、『日記』の継次性を支える具体的な時間記述を検討する。散文部分に日時が明瞭に示される例としては、『四月十余日』『五月五日』『七月になりぬ。七日……』『かかるほどに八月にもなりぬれば』『九月廿日あまりばかりの……』『十月にもなりぬ。十月十日ほどに……』『十一月ついたりころ』『十二月十八日』『としかへりて正月一日』を拾うことができる。これらの間に『又の日』『かくて』等が配される。又、詠歌内容が特定の日時を示す場合がある。四月末日から五月一日にかけての「はとときす……」「しのびねは……」の二首、及び五月五日の詠と推定される「をりすぎて……」の歌、七月七日の贈答二首がそれである。

これらの例を見ると、六月の明示を欠く以外は、各月毎の明瞭な記述を必ず備えており、作者の継次意識は、凡そ月次単位のもののように考えられる。(仮に歌反古を基にして構成したとすれば、歌反古を選別する際に月次の意識が働いたということになる)。更に検討すると、例えば「九月廿日あまり」の記述等は、日付け自体に体験を踏まえた独自の意味合いはなく、「有明の月」の場面展開の必要から用意された可能性が強い。「四月十余日」も、宮との交渉が始まった特別な日時として記されたとするものが普通だろうが、同時に草青やかに人恋しい夏のはじまりとして、更には「五月待つ」場面を明瞭に示す語として置かれたとも考え

られる。同様に「七日」は七夕を示す。「十月十日ほど」と「十一月ついたりころ」は、時雨と初雪の場面に適った任意の日と解され、「正月一日」は院の拝礼の日を示す日時である。このように、列挙した具体的な日時の中には、場面設定と関連して大まかに記された例が多い。「八月」の石山詣で、「十二月十八日」の宮邸入りの二例は、日付けと場面の結びつきに必然性がなく、それだけ体験に根ざした日時表記と判断される。

このように、この『日記』の継次性は、体験的時間を根底に持ちながらも、大枠として月次に選択、配置された場面を連ねることとで支えられている。一次的な体験をそのままに叙述するのではなく、体験の再構成による作品であることに留意しなければならぬ。

## (2)

前項に於いて作品の継次性が、凡そ月次に配置された場面の連なりによって保証されていることを述べた。が、子細に見ると、同一月内に配される個々の場面の総てが、継次性を含んでいる訳ではない。作品の前半部分において特に顕著に見られる現象なのだが、季、あるいは夫々の月の月次意識とは全く無関係な場面が相当数挙げられる。即ち、勅撰集の部立で言う「恋」あるいは「雑恋」に属するような場面である。この項では、月次構成の枠の中にあって、独自の様相を見せるこのような場面の持つ意味を考えてみたい。

説明の便宜上、作品をA・B・Cの三部分に分けて考える。

『全講和泉式部日記』の章段に付けられた標題を掲げ、その上に私の区分、その下に『和泉式部日記』（日本古典文学全集・藤岡忠美校註）解説に示された区分を示す。以下引用本文も全集（三巻西本を底本とする）による。

1 夢よりもはかなき世の中

2花たちばなの香

3 はじめてものを思ふあしたは

4 あひてもあはで

5まきの戸口

6 五日雨のころ

7 あかつき起き

## 8 末の松山

9 七月のころ

……とあり。あはれにはかなく、頼むべくもなきかやうのはかなしごとに、世の中をなぐさめてあるも、うち思へばあさましう。」

10 石山詣で

11 霧りたる空

12代詠

### 13 手枕の袖

※二首重ね贈答

※二首重ね贈答

※五首贈答

※二首重ね贈歌

※「手枕の袖」の詠み合い

(全集区分)

- B

14 ことの葉ふかく

※連歌

15 山の紅葉

※二首重ね贈答

16宿世にまかせて

77 うらむらむ心はたゆな

18霜がれのころ

19霜の日雪の日

20 この世ならざる契り ※連歌・二首重ね贈

答·古歌贈答·初句揃之

……など言ふほどに、例のつれづれなぐさめて過ぐすぞ、いとはかなきや。」

21 宮邸入り

※初句揃え

22 さぶらひつきて

23  
波瀾

宮の上御文書き、女御殿の御ことば、さしもあらじ、書きなしためりと、本に。」

(3)

-(2)

当する部分の処理だけである。主題の展開に沿って為された氏の区分においても、ここは移り行きの部分とされているので、私の区分に従った場合でも、主題展開の把握に抵触してくるというのはない。私の区分の基準は、最終的には本稿全体を通じて論証することになるが、場面形成に働らく「和歌的な論理」が、夫々の部分でやや異なると思われることにある。B部分に特殊な形態の贈答歌（※で示した）が偏在することはその一つの表われであ

る。(夫々の部分の末尾に置かれる構文の対応も注意される。)

さて、『日記』のA部分の中には、所々に同一情況の繰り返しもとれるような表現が見られる。例えばA部分の「あひてもあはで」「まきの戸口」は物語での前後にやって来た宮を、二度とも会わずに帰した場面として設定される。これをB部分の「石山詣で」の場面と対置させて次に示す。

A「あひてもあはで」

……二三日ありて、忍びてわたらせたまへり。女はものへ参らむとて精進したるうちに、いと間遠なるもころざしなきなめりと思へば、ことにものなども聞こえて、仏にことづけたてまつりて明かしつ。つとめて、「めづらかにて明かしつる」などのたまはせて

いさやまだかかる道をば知らぬかなあひてもあはで明かすものとは

あさましく」とあり。……またの日……と聞こえて、参りて、三日ばかりありて帰りたれば……

A「まきの戸口」

宮、例の忍びておはしましいたり。女、さしもやはと思ふうちに、日ごろのおこなひに困じて、うちまどろみたるほどに、門をたたくに……やをら帰らせたまひて、つとめて、あけざりしまきの戸口に立ちながらつらき心のためしとぞ

見し

憂きはこれにやと思ふも、あはれになむ」とあり。……

B「石山詣で」

かかるほどに八月にもなりぬれば、つれづれもなぐさめむとて、石山に詣でて七日ばかりもあらむとて、詣でぬ。宮、久しうもなりぬるかなとおぼして……たまはせて、石山に行きたれば、仏の御前にはあらで、ふるさとのみ恋しくて、かかる歩も引きかへたる身の有様と思ふに、いともの悲しうて、まめやかに仏を念じたてまつるほどに……

参詣という同様の情況設定があるので、A・B夫々の場面構造の差異が明瞭になろう。Aにおいて参詣は、女の男との係わりから意図された行為としては全く示されず、「ものへ参らむ」と記されるだけである。当の参詣自体も「参りて、三日ばかりありて」で片づけられる。Bが参詣先を明示し、そこでの女の心理や情況を、不十分なながらも描写しようとするのとは明らかな懸隔がある。又、引用は省略するが、同じく宮を帰す場面がB「霧りたる空」の最初にある。同一主題とも言えるその部分と対比させても、Aの描写の簡略さは歴然としている。Aの構成は、男女の心の行き交いを実情に則したプロットとして連ねるようには意図されておらず、むしろ「くれどあはず」といった恋の典型的場面の形成をねらいとしたもののように思う。全集頭註に「平安後期に『逢ひて逢はざる恋』という歌題がある」と指摘するが、それより流動的な形ながら、先行するものとして『六帖』五に「くれどあはず」という分類題があることに注意したい。そこには、

いまさらにとふべき人もおもほへずやへむぐらしてかどさせてへ

そのはらやふせやにおふるははきぎのありとてゆけどあはぬ

君かな

等が集録されている。直接類似するような表現は見出しえないが、一つの恋の型として男を拒絶する場面が観念されうる情況が、和歌世界ではできつつあったと言えよう。「櫛の戸」も、ここではそのような場面の道具立てに用いられている。

同様の例を更に掲げる。

A〔あかつき起き〕

からうじておはしまして……「いざたまへ……」とて車をさし寄せて、ただ乗せに乘せたまへば、われにもあらで乗りぬ。人もこそ聞けと思ふ思ふ行けば、いたう夜ふけにければ知る人もなし。やをら人もなき廊にさし寄せて……しいてのたまへばあさましきやうにて下りぬ。……など物語あはれにしたまひて、明けぬれば車寄せて……女道すがら、「あやしの歩きや。人いかに思はむ」と思ふ。あけぼのの御姿の、なべてならず見えつるも思ひ出でられて、

宵ごとに帰しはすともいかでなほあかつき起きを君にせさせじ

苦しかりけり」とあれば、

朝露のおくる思ひにくらぶればただに帰らむ宵はまされり……とあり。あな見苦し、つねにはと思へども、れいの車にておはしたり。さし寄せて、「早や、早や」とあれば、さも見苦しきわざかなと思ふ思ふ、ゐさり出でて乗りぬれば、昨夜の所にて物語したまふ。上は、院の御方にわたらせたまふとおぼす。明けぬれば、「鳥のねつらき」とのたまはせて……

殺してもなほあかぬかなにはとりの折ふし知らぬ今朝の一

声

御返し、

いかにとはわれこそ思へ朝な朝な鳴き聞かせつる鳥のつらさは

B〔宿世にまかせて〕

このごろは四十五日の忌だがへせさせたまふとて、御いとこの三位の家におはします。例ならぬところにさへあれば、「見苦し」と聞こゆれど、しひてゐておはしまして、御車ながら人も見ぬ車宿に引き立てて、入らせたまひぬれば、おそろしく思ふ。人しづまりてぞおはしまして、御車にたてまつりて、よろづのことをのたまはせ契る。心得ぬ宿直のをのこともぞめぐり歩く。例の右近の尉、この童とぞ近くさぶらふ。あはれにももののおぼさるままだに、おろかに過ぎにし方さへくやしうおぼさるるも、あながちなり。明けぬれば……つとめて、

寝ぬる夜の寢覚の夢にならひてぞふしみの里を今朝は起きける

御返し、

その夜よりわが身の上は知られねばすずろにあらぬ旅寝をぞする

と聞こゆ。

宮が女を連れ出す場面は、数度の繰り返しの後、最終的に宮邸入りへと繋がるもので、主題に係わる空間設定として注目される

のであるが、その最初の描写がAである。これを見る限りでは、宮邸入りへの始発の場面としての認識は窺いえず、その描写は極めて簡略で、当の場所も情況も具体的に示されない。しかも全く同様の場面が続けて繰り返される。Bも又同様の設定であるが、Aの後に位置する場面であれば、より簡略にされても良いはずの情況や心情の描写が、このBにおいて逆に詳しくなる傾向を見せる。置かれた歌も、これまでの経過を顧み、現在を「旅寝」と捉えるなど、既成の和歌の観念では捉えられないものとなっている。Aの貧弱な散文叙述は相対的に和歌を浮き立たせる。繰り返しによっても散文部分は何ら時空の広がりを得ないのに対し、和歌二首を加えることで、この場面は「あかつき起き」という和歌の概念で統括される。『六帖』に「曉におく」と分類された和歌の中には、

長き夜を思ひ明して朝露の起きてしくれば袖ぞひちぬる

恋々て稀にあふ夜のあかつきは鳥のねつらきものにざりける  
の二首を拾うことができる。前の歌が宮の返歌「朝露のおくる思ひに……」に踏まえられていることは明らかであろう。後の歌の「鳥のねつらき」は、宮の言葉として直接示され、更に後の贈答二首の創作動機となっている。『六帖』に限らず、題こそかかげられないものの、『古今集』恋三等にも「曉起き」を詠じた一群が見られる。

このように当時の和歌世界では、後朝の場面に適う和歌の素材がある程度限定され、詠歌内容も観念化されつつあったとみてよい。『六帖』の分類題の下に集められた和歌は、その分類題と共

に、ある「場面」を享受者に想起させたのではないだろうか。ここに明らかなのは、そのような和歌の観念に則して体験を整理し再構成する作者の態度である。生活自体が和歌的に情趣化されたと言われる当時であれば、特に恋愛の進展過程が、和歌的な形に則って始めて成り立つといったこともあったかもしれないが、それと、和歌的な場面構成を意識して日記を編むということとは、問題が異なる。「あかつき起き」に焦点を合わせるか、体験に密着した叙述を計るかは、作者の構成態度にかかっているのである。

このようなA部分の構成上の特徴は、繰り返しの場面に限らずA部分を貫くものである。例えば、難解と言われる

待たましもかばかりこそはあらましか思ひもかけぬ今日の夕暮

は、やはり『六帖』五の「人を待たず」にみられるような世界を背景に置いて考えるべきで、

来むと言ひて来ぬ夜も有るをこじと言ふを来むとは待たじこじてふものを

来むと言ひて来ざりし夜もありしかば待たぬしもこそ待つにまされる

等の歌が形成する「待たず」の本意を踏まえた場面設定であると見たい。宮の返歌

ひたぶるにまつともいはばやすらはで行くべきものを君が家路に

もその上に成り立つ返歌である。

又、『全譜』が「末の松山」とした章段は言うまでもなく『古今集』二十所収の「君をおきて」の歌を背景とした場面である。途中、男を「雨も降らなむ」の歌で引きとめるこれも型通り（『六帖』五「人をとどむ」に「まてといはばたえて畏しにはたずみせきあへぬまで雨も降らなむ」「鳴神をとよますばかりさしくもり雨も降らなむ君をとどめむ」——後者は、『拾遺集』に類歌あり——が収められている。）の小休止を挟むものの、全体が「うらみ」の場面展開を見せている。

このように見てくるならば、Aの大部分の場面が、和歌世界で一首の本意として形成されつつあった独自の観念を根底に置いていることが確認されよう。四月——たちばな、あした、またず、五月六月——来れどあはず、あかつきに起く、末の松山、うらみ、七月——七夕のように月次構成の枠の内部を埋めるのは、典型的恋の場面である。体験的な時間は、恋の場面の連なりとして再構成されることで、観念的時間を獲得する。A部分の基調には、このように、経験性、継次性を遮断する形の構成意識が働いていることを指摘しておきたい。

### (三)

この項では、場面形成に見られるもう一つの傾向、即ち対比的に扱ってきたB部分の構成について簡単に触れておく。AからBへの移りゆきは、截然と構成論理を変化させて意識的になされた訳ではないので、相互にA的部分、B的部分は入り組んでいる。ただ、Bにおいて顕著に贈答形態は多様になるし、散文叙述の息

も長くなる。主題との係わりで言えば、Aでは、女への宮の信、不信と、それを受ける女の揺れ動きの中で恋の諸場面が展開された。Bでは両者の係わりが緊密になり、相互の心情に入り込んだ微妙なやりとりも増す。女の自照表現が宮邸入りの主題と絡んで多く見られるようになるのに加えて、男の側の宗教的心情の表出により、両者の結びつきを根源的な所で示そうとするに至る。

このような主題の展開に伴い複雑化した両者の交渉を担うのは、「和歌的な論理」では不十分であったのだろうか、和歌は恋の場面の形成のためにはなく、情況から生じる男女の心理表出のために用いられ、自ずと形態も多様化する。例えば、「手枕の袖」を詠み込んだ歌の応酬は、和歌の固定観念に依拠したものではない。この句を折り込んだ歌が当時の諸歌集に検索されないことから知られるように、それは二人の関係の進展の中から形成された特殊な言葉なのである（『全譜』参照）。場面の展開は、そのような言葉が生じてきた一回的情况の描写から始まり、それを折り込んだ歌の応酬を示すことで、両者の係わりの進展を示す。これは「あかつき起き」が、同一設定の場面の繰り返しで典型性の充足を計ろうとしたのとは異なり、既成の和歌的観念からかなり自由に、それだけ体験性を回復する形で場面構成がなされていることを示すものであろう。

次に、『和泉式部統集』の言わゆる日次歌群との表現の類似、あるいは季節感や物の見方の在り様の類似等の指摘が、多くこの部分についてのことであることに留意したい。言うまでもないが、日次歌群は十月前後に限定される極めて狭い範囲の歌群であ

り、それが『日記』の主として秋から冬への部分と類似するといふことなのである。指摘された十ヶ所余の類似表現のうち、A部分に属するものは8「末の松山」の章段に一ヶ所だけで、残りはすべてB部分の、しかも11「霧りたる空」、13「手枕の袖」、15「山の紅葉」の章段に限られた類似である。その類似の大半が、秋の天象描写と、それに触発される心情表現である。心情は、例えば『続集』『日記』に共通の引き歌である、

かくばかり経がたく見ゆる世の中にうらやましくもする月  
かな（『拾遺集』雑上）

み吉野の山のあなたに宿もがな世の憂き時のかくれがにせむ  
（『古今集』雑下）

が示すような世界、即ち和歌が「雑歌」の範疇で捉えてきた観念に近い形で描かれる。このことは、日次歌群との対比とは無関係に、『日記』内部の引き歌のみを検討しても出てくる結論である。即ち、今引用した『拾遺集』の「かくばかり」の歌が「末の松山」の章段に出てくるまでは、『日記』の引き歌には三代集の恋歌が多いが、この一首以降即ち時節が秋へと移行するにつれ、殆どが雑歌の引用になる。作者がこの季と、それに結びつく心情に特別の関心を持つことは、種々の破綻を来たしながらも、『手習文』を組み込んだ場面を設定せずにはいなかったことにも明瞭に示されているであらう。

Aに見られた和歌的観念性からは、脱脚する傾向を見せつつ、Bは作者の体験性の復元に比重を移し、更にその好尚を反映して場面形成を行うようである。部分的には、Aに見られるような和

歌的小場面を含みながら、和歌が消滅するC部分への構成の変化にも対応しようような散文叙述を培っていた部分と言えようか。だが、その不十分さの故か、特定の観念の支えもなく、好尚を反映させる余地もないCの宮邸での場面に入ってすぐに、作者は『日記』を終結させる。

#### （四）

以上のように見てくるならば、この『日記』においては、継次的な時間意識に絡んで、和歌的な構成論理とでも言うべきものが、作品構造を規定していると言えるのではないだろうか。場面を構成する意識への顧慮が働かないと、作品を日次的に平板に記事が羅列されたとみるか、主題展開に沿ったプロットの配置としてしか捉えられなくなる。素材の再構成は、時に継次性の枠に矛盾を来たすほど、場面設定に主眼を置いて成されている。

さて、『日記』に見られる以上のような構成方法は、和泉式部の営為として可能であっただろうか。今、自作、他作を云々するのが目的ではないが、『和泉式部続集』日次歌群にも言及してきただけに、検討を加えておきたい。『日記』に指摘してきた構成方法の特徴を、歌集の諸群作の構成方法に照して、その可能性を探るということになる。

『和泉式部歌集』（正・続集）に見られる幾つかの群作歌は、数首の和歌を連ねることにより、一首によつては尽くしえない自身的情感を様々な角度から形象し、或いは一定の整理を加えてより主題性を深めた形で表出しようとするものである。表現行為へ



の主體的な志向を先ず確認しておくべきであらう。

これらの群作歌は、その主なもの大別すると、一次經驗的な構成をとるもの——帥宮挽歌群・統集日次歌群——と、一次經驗の再構成の形をとるもの——定教歌の歌群・折句的歌群——の二系列になる。夫々主題性は明瞭であるが、前者は、生活經驗に沿った形の、繼次的時間構成をとり、詞書も詠歌情況を叙述する形をとる。後者は經驗的な時間の枠をはずし、それとは別の構成論理——「親身岸額離根草……」のような、主題を端的に示す句の一音一音を、一首の冠に折り込むことで群作を構成するとか、「五十首歌」のように、独自の題を設定するなどの方法をとる——により、主情の客觀化を計る。

前者のとる繼次的な歌群構成の方法が、『日記』の根幹にある時間構成に連なるものであることは明らかであらう。又、後者の歌群が示す「音」や「題」を独自に設定する方法は、一首に収まらない作者の抒情を、總括的に客觀化し、場面化しようとする所から採られたものと理解される。詳述する余裕はないが、「百首歌」恋歌群の中にも、「髪」「鏡」「枕」等の『六帖』に分類題として挙げられたような恋にからむ事物への着目の傾向が見られる。外在的事物を契機に恋情の具象化、場面化を計るのである。

同様に再構成の歌群である「五十首歌」は、「ひるしのぶ ゆふべのながめ よひのおもひ よなかのねざめ あかつきのこひ」の五題を夫々小歌群に「書きわけ」たものである。「ひる」から「あかつき」に至る時間は、一日の時間帯を單純に示したものである。歌群全体を通じて、少なくとも数日に渡る時間の経過と

心情の推移が看取される。「君をみであはいくかになりぬらむ涙のたまはかずもしられず」(ひるしのぶ)に見られるような切迫した哀哭の情を連ねた第一の歌群に対し、最後の歌群「あかつきのこひ」では、「とはざかりにし人ぞ恋しき」「鳥の音におどろかされし時はなにどき」と、相手を対象化し過去を顧る形の、沈静した表現を見せる。即ち、夫々の小歌群に於いては、与えられた「昼」や「宵」「曉」などの場面性を追求し小歌群独自の纏まりを貫きながら、それら五歌群を排列することにより、歌群全体としての繼次的時間性を獲得するという構造がある。季に寄せるような日常的次元での時間性は稀薄で、個別の場面を連ねること、抽象化された「恋」の時間の二重構造を計るのである。

再構成歌群が示す以上のような特徴、即ち外在的事物を契機とする客觀表現への志向、あるいはそのような志向に伴って生じる場面性への時間軸の組み込み、これらを和泉式部の抒情の方法とみるならば、その延長線上に『日記』を置くことは、強ち不自然なことではないように思われる。

和歌世界が育くみつつあった素材と詠歌内容の固定的な結びつき、そこに形成される特殊な觀念への顧慮の有無が、例えば、この『日記』と『伊勢物語』との、あるいは『蜻蛉日記』との位相差を計る一つの指標となるのではなからうか。

注(1) 吉田幸一氏『和泉式部研究一』(昭39)他。

(2) 鈴木一雄氏『全講和泉式部日記』(昭40)、プロットの詳細な検討については、宮崎庄平氏『平安女流日記文学の研

究」(昭47)がある。

(3) 本稿に係わるのは、主として恋題の形成過程に於いて次第に明瞭な形をとるようになる素材と主題の問題である。

(4) 『六帖』四「恋」、五「雜思」に収められる。恋の状態、心理、時間的経過に係わるものが混在している。「いひはじむ、はじめてあへる、あした、あか月におく、くれどあはず、人をとどむ……」など。

(5) 五月十八日、あるいは十九日の誤写と見る説がある。

(6) 為尊親王の一周忌の時期であることに絡むと見る説がある。

(7) 織田裕子氏「和泉式部日記の作者について」(『国語国文』昭33・4)の区分ともややずれが、藤岡氏の区分を掲げる。これらの区分は主題展開からのものであり、私の区分とは角度が異なる。『全講』の標題は、個々の章段と和歌の係わりが端的に示されている故に掲げた。贈答形態の表示も『全講』に依っている。

(8) 宮本美万子氏「和泉式部日記著作についての一試論」(『平安文学研究』昭36・6) 森田兼吉氏「和泉式部日記『風のまへなる』をめぐる——日記と続集日次歌群との関係——」(『平安文学研究』昭41・6) ↓『和泉式部日記

論攷』所収)

(9) 諸説あるが岩波文庫『和泉式部歌集』の1478~1547迄を「日次歌群」と見ておく。

(10) 1495白露のうちおきがたきことのははかはらん色のをしきなるべし

と、『日記』14「ことの葉ふかく」に示される連歌、言の葉ふかくなりけるかな、白露のはかなくおくとみしほどにも類似表現として付加できようか。

(11) 和歌を踏まえた散文表現の意味ではなく、会話或いは心内語として直接引かれる歌。日次歌群詞書に極めて多い。

(12) 宮の場合は『六帖』が多い。女は、「末の松山」迄は『六帖』から1、『後撰』恋1、『拾遺』恋3、『古今』夏1と引かれ、その後は、『古今』雑3、『拾遺』雑1、その他となる。

(13) 歌集中の群作歌の構造については、拙稿「和泉式部百首恋歌群の考察」(『国文学研究』六十九 昭54・10)、「和泉式部続集『五十首歌』の考察」(『物語・日記文学とその周辺』所収 昭55)、「和泉式部集『親身岸額離根草、論命江頭不繫舟』の歌群に関する考察」(『国文学研究』七十三 昭56・3)を参照頂きたい。

『国文学研究』在庫一覧

33集(41年3月) 34集(41年10月)

35集(42年3月) 36集(42年10月) 37

集(43年3月・特集窪田空穂研究) 38集

(43年9月) 39集(44年3月) 41集(44

年12月) 44集(46年6月・中世文学小特

集) 45集(46年10月)

近代文学小特集) 47集(47年6月)

集(47年10月) 49集(48年3月・歌論小

特集) 51集(48年10月) 以下、73集(56

年3月)を除く各集は、在庫が有ります。

50集以降の特集号は、以下のとおりです。

58集(記紀小特集)

65集(中近世文学小

特集) 67集(古代文学小特集) 68集(近

代文学小特集) 76集(国語学小特集) 37

集は千円、それ以外の集は五百円にて、お

わけいたします。購入御希望の方は、国文

研究室まで葉書にて御連絡ください。